

明治三十四年十一月六日發

二白山下君子金内と稱して以て主人
妙をいひて授く者一を去りし事次く
院王亦其是下を於て之と云旨をいひ并ふこ

此の如き書を秘せしむるもいふは
香もあつたを分れ

房のさす毛をけりて能きて是下の病

傍上は正しくの情を常白とせり故に一書

此れとも尚ふかたはせよ

此は是下し句措詞頗るんをさすめ

ありと持たせりし此れとも信ふ句波を

さすの積をたす 例ハハ眼目を撮て三 是れと學

し微服なり詰ふお不知たよ

おれはとてし句是れ洒落し句の妙密なり

指起の句がう僕もさす是れ船の句を尚とん

若し甚一と撰とせりるる一和社のおま

がしとやまてこの句と採らん是れ思ふ所と據

今相似たり現わらんは取らぬよ

僕起り句せり常とて一信わらん淋しくも一

代の夕と吟せしう回より照らすと

神田錦町

多士に記す女中徳子ぬ文他日序此二回時此日
録に記す者説也



相為得倉材木座村
 奥野廣池
 水



東京市日野町三丁目十七番
 長五川下野之助

明治三十四年十二月三日附

名代の取柄を道

に多く中得毎に

対して心可く

向ふ懐かき也結

構へて心能く毛

布し心念心出如取

如化の上道より

とて成るるの

し原に成るる

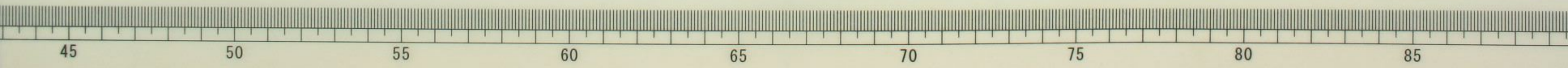
構へて心能く毛

向ふ心

長谷川

向ふ心

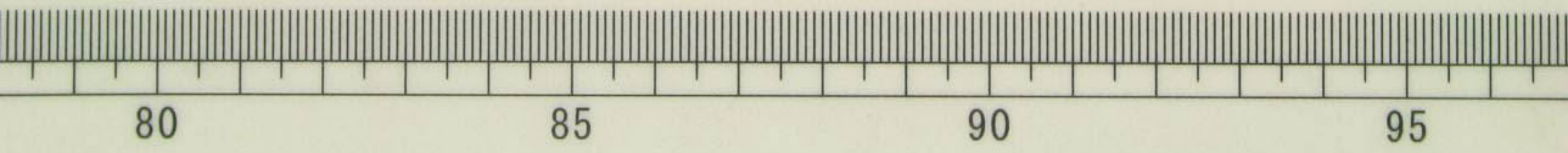
神田錦所



相五 鐘念材木庄村
伊多 野 廣 記 柳
伊多 野 廣 記 柳



赤之 山 神 田 所 三 寸 尺
十 七 寸 尺 之 餘 三 寸 尺
老 川 野 之 介
十 三 寸 尺



明治三十四年
十二月三十日附

本。表をくちぎる引取り

ハハ少様より字をいす

去年のりとおおのり

お中よとて才表に致す

とてお中よとて空に朽ゆし

と昔より此の味は

○少叔少之ちの而る

のよえの母をいへ

の道に生る味の中

本月ハ昔ハの道に

尤も昔ハの味は

入る味は昔の味と

味は昔の味と

味は昔の味と

味は昔の味と

味は昔の味と

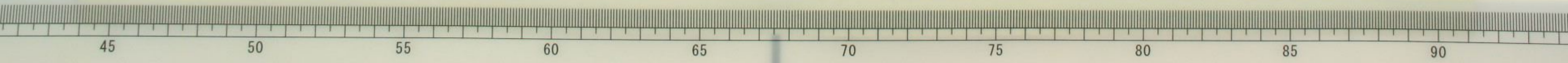
原三

原三

原三

原三

神田東紺町



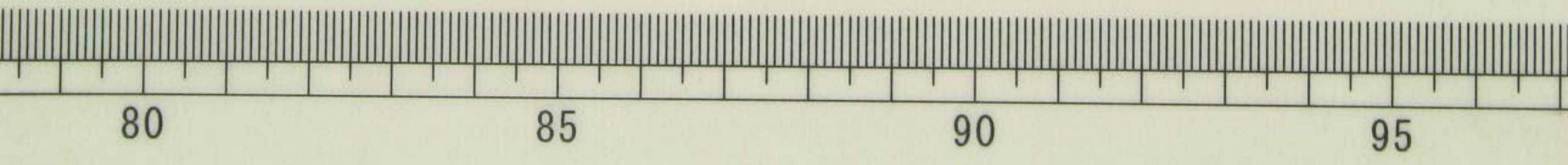
在東京神田東紺糸町三丁目
 福井榮吉方
 長石川名之物
 杉原海老丸
 上り三丁



相分澤々心材本丸村
 集新譜記
 伊原能三郎
 伊原能三郎



五



明治二十五年七月十日附

木	知	し	う	の	正	規	に	て	口	花	流	み	と	ら	し	も	他
氷	お	し	し	ま	ぬ	い	の	様	原	ま	今	に	齋	止			
み	あ	り	り	能	夕	し	心	紫	心	ま	何	と	定	規	の	正	
神	お	時	り	の	花	し	也	れ	に	山	下	ま	り	正	今	を	加
美	子	好	起	女	に	ま	し	ん	り	せ	ん	た	の	ん	き	に	は
山	下	ま	り	に	口	博	河	ら	り	た	あ	の	同	君	の	氣	振
ま	ぬ	し	り	花	鏡	の	報	ら	る								
と	ま	お	り	花	又	井	に	い	き	し	ら	の	八	井	を	忘	り
城	り	花	り	何	多	起	を	い	や								
ま	ら	の	口	何	ま	り	の	母	お	に	も	山	下	表	に	い	く

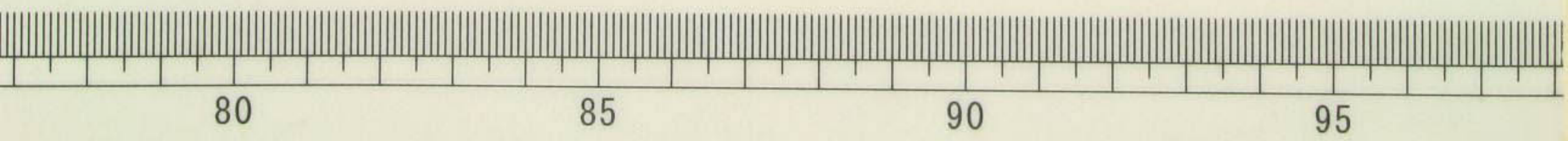
い

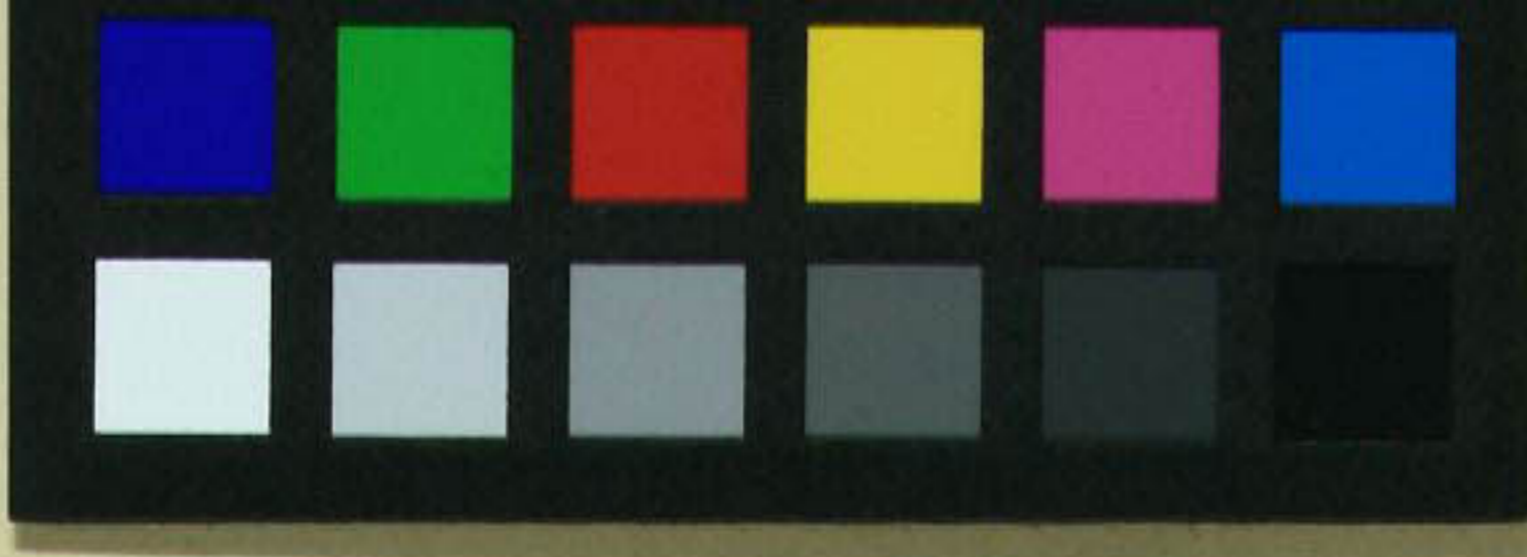
用古抄し玉

長川

本御菊板行

本御菊板行





相
材
石
産
村

右
川
字
方

奥
野
産
記
標



六

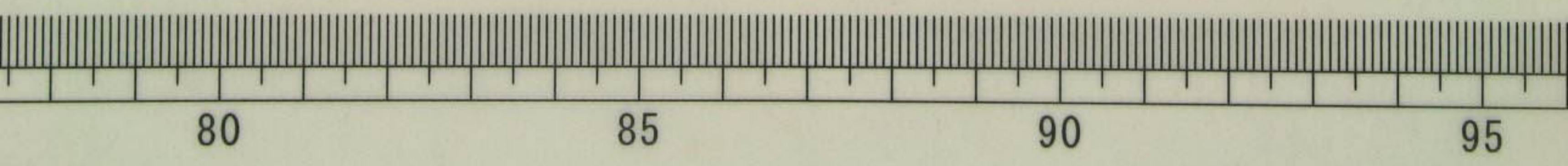


本
京
本
心
菊
坂
所

字
上
石
多
地

本
石
川
坂
之
助

七
月
封



80

85

90

95

明治三十五年八月八日附

此後この句もあれと
おとあ

あんなにわけては多に能

の懐もあつたよあ

あつし^{あつ}あつあつあつあつ

あつあつあつあつあつあつ

あつあつあつあつあつあつ

あつあつあつあつあつあつ

あつあつあつあつあつあつ

あつあつあつあつあつあつ

あつあつあつあつあつあつ

あつあつあつあつあつあつ

あつあつあつあつあつあつ

あつあつあつあつあつあつ

あつあつあつあつあつあつ

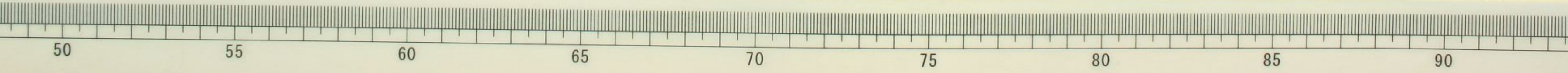
あつあつあつあつあつあつ

あつあつあつあつあつあつ

あつあつあつあつあつあつ

あつあつあつあつあつあつ

神田仲猿堂何々



相好 鎌倉 材木 外村

奥野 比 柳

吉川 抄 二 万



七



東京 神田 仲 橋 集 介

十七 万 多 地

吉川 比 之 介

八 万 一

明治三十五年九月十五日附

角屋

右の如き水は流するの故に御前が立り
 申すに如し

例に依りて三月の間に御前
 送すべく、三十九日、御前
 横の如き如し

さすは流すに如し、御前
 御前、さすは流すに如し、御前
 御前、さすは流すに如し、御前
 御前、さすは流すに如し、御前

御前、さすは流すに如し、御前
 御前、さすは流すに如し、御前
 御前、さすは流すに如し、御前
 御前、さすは流すに如し、御前

御前、さすは流すに如し、御前

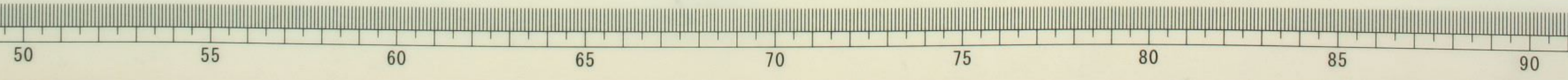
御前、さすは流すに如し、御前

御前、さすは流すに如し、御前

御前、さすは流すに如し、御前

御前、さすは流すに如し、御前

神田仲猿堂所記



相州澁谷材木店村

志川村

奥野廣記 様

八



東京神田仲儀車行

十番町

長石川原三介

九リ

為不見のニさむや
とすをよ云をれ
ればこそ全體の玩
たみ有ちこそ
ふかしの心と深
いよ氣の陰ら
しくはせらるるま
ごみの十のたしは
それとはまごみと
取れえとよの末は
たやうに
くりがらの山
のさむよとの
舟
たつて方・優り
まー
高取の胸のさ
さよ音山
とよ名内なるり
るれはまのさ
見よ角一工夫か心

然るにその先の大さす、取きいとは、奥所の此名は山	有るにその先の大さす、取きいとは、奥所の此名は山	ありが、まゝ、お前、中、山、名、と、北、ハ、印、度、の、霊、窟、	山、の、回、を、和、げ、て、然るの、高、根、と、又、然るの、山、と、し、い、に	紛、ル、う、山、ハ、こ、れ、も、然、る、ハ、ま、ろ、ま、ろ、 お、お、 を、全、體、の、	ま、ろ、ま、ろ、ま、ろ、ま、ろ、ま、ろ、ま、ろ、ま、ろ、ま、ろ、ま、ろ、ま、ろ、ま、ろ、	向、上、結、を、ん、う、ハ、味、ま、ま、ま、ま、ま、ま、ま、ま、ま、ま、ま、ま、ま、ま、	り、働、ま、わ、り、と、ま、ま、ま、ま、ま、ま、ま、ま、ま、ま、ま、ま、ま、ま、	再、考、の、六、句、は、あ、れ、も、あ、れ、も、あ、れ、も、あ、れ、も、あ、れ、も、あ、れ、も、あ、れ、も、	ま、代、の、ま、ま、ま、ま、ま、ま、ま、ま、ま、ま、ま、ま、ま、ま、ま、ま、ま、ま、	小、山、の、お、り、り、れ、ん、ん、ん、ん、ん、ん、ん、ん、ん、ん、ん、ん、ん、ん、	横、を、あ、り、り、り、り、り、り、り、り、り、り、り、り、り、り、り、り、り、	唯、徒、を、あ、り、り、り、り、り、り、り、り、り、り、り、り、り、り、り、り、り、	と、急、げ、り、り、り、り、り、り、り、り、り、り、り、り、り、り、り、り、り、	口、直、に、あ、り、り、り、り、り、り、り、り、り、り、り、り、り、り、り、り、り、	梅、歌、の、お、お、お、お、お、お、お、お、お、お、お、お、お、お、お、お、お、	く、く、く、く、く、く、く、く、く、く、く、く、く、く、く、く、く、く、	向、上、の、ま、ま、ま、ま、ま、ま、ま、ま、ま、ま、ま、ま、ま、ま、ま、ま、ま、	や、う、と、あ、り、り、り、り、り、り、り、り、り、り、り、り、り、り、り、り、り、	七、夕、や、あ、り、り、り、り、り、り、り、り、り、り、り、り、り、り、り、り、り、
--------------------------	--------------------------	----------------------------------	---	---	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--------------------------------------	--	--	--

橋と下りて高牛と坂をよちるに覺し比故子と性撫一

とてこれハ性撫とさるけの働りてハ叶をば許海

さる橋より仙遊とんがきとくハ此は陸の陸の

女小杜也之類は信似さるるをさる女句ハ大原や陸

の生てあふ徳月 心まの如ハ亦忘れテ、矢任色蓮

の心人ハハ 作類は依程さる有陸の秋ハ秋の

中ゆ身おの弟當はさるまもさるりたりハハさる日祝吟

海をさるさるりさるさるさるさるさるさるさるさる

さるさるさる中ハ桐葉や台孫王と扇くさる

りハガ有りハ 法林とさるハ秋の句ハハハハハハ

けがの功名ハハハハハハハハハハハハハハハハハ

と淡月と一句とて山鳩のさるさるさるさるさる

山鳩さるハハハハハハハハハハハハハハハハハ

体義さるハハハハハハハハハハハハハハハハハ

さものさる

竹さるハハハハハハハハハハハハハハハハハ

さるさるのさるさるさるハハハハハハハハハハハハ

一向ハハハハハハハハハハハハハハハハハ

はさるさる汝ら啼く聲ハハハハハハハハハハハハ

大なりきこりたりきものたれは

似一ツのりき跡やこれたの院

薄刈し流る衣とびくの鳴く

吐息つくまきこふ路の行くて

三吟ぢか〜六ふあ〜天よ此くお御子とあつて

あはれの雨のそよこふとふのたぐいぬる

途がよは多量のそよ風のそよとうね

多量のそよ風の中山そよはてたまきる石のそよ風の也

さよの風は少〜異ふ〜て〜や

は頂し付度のか〜に障りま〜や

かたはら〜の國二件ありま〜や

産屋

かたはら

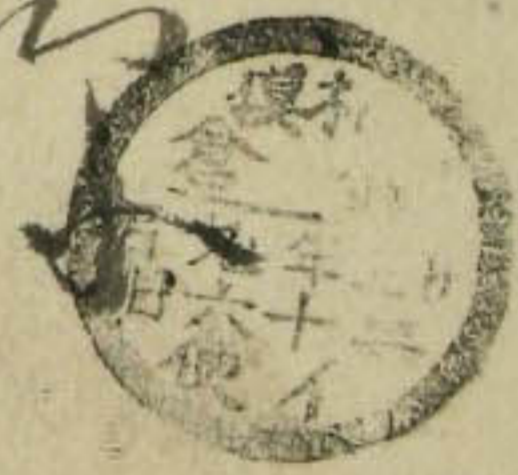
神田仲猿出所 157



相子階念山村在座村

吉川

奥野



九

東京市日仲依草介

十七番地

吉川在座之介

九月二十三日

明治三十五年十月十日付

杉野一子 我々の世に

かかすくも 杉野を

多岐かきくし 尚会也

る水多田 謀也

無語也

千三田 休傷 大熱 取 此

道仁 右 未付 日 見 取

山 寺 杉野 杉野 杉野

かに 杉野 杉野 杉野

杉野 杉野 杉野 杉野

山 寺 杉野 杉野 杉野

杉野 杉野 杉野 杉野

杉野 杉野 杉野 杉野

杉野 杉野 杉野 杉野

杉野 杉野 杉野 杉野

と今も枯らぬわが心

と今も枯らぬわが心
梅の花

と今も枯らぬわが心
梅の花

と今も枯らぬわが心
梅の花

と今も枯らぬわが心
梅の花

と今も枯らぬわが心
梅の花

と今も枯らぬわが心
梅の花

と今も枯らぬわが心
梅の花

又

と今も枯らぬわが心
梅の花

梅の花

と今も枯らぬわが心
梅の花

梅の花

と今も枯らぬわが心
梅の花

と今も枯らぬわが心
梅の花

と今も枯らぬわが心
梅の花

と今も枯らぬわが心
梅の花

と今も枯らぬわが心
梅の花

まをのかに大仏おぼしり

ツラツエ
而杖のまをさこけて後椿

而杖のまをさこけて

何やまをさこけて

有

梅うまのまをに

たむき

飛鳥はちりけき女あり

まをのまをさこけて

まをのまをさこけて

僕うまのまをさこけて

のぬけてるまをさこけて

まをのまをさこけて

イヤこまをさこけて

くまをさこけて

まをのまをさこけて

んま物

んま物

相州 鎌倉 材木 庄村

古川 奥野 廣之 原



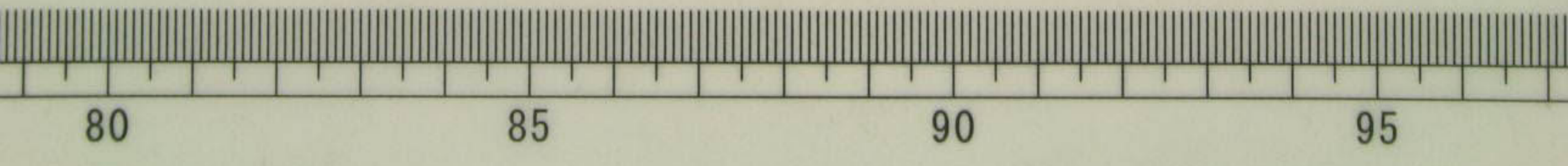
奉言 神田 中 猿 草子

十 吉 吉 氏

吉 吉 氏 原 之 介

十月十日

二



の事は何れも人共便方

の減りたる由用及ひる事一

中世一が上下毛減換好ま

あつた千代は二付も得な事

押しよと解い望と存し其儘

とお為しそくろく院の御り

中世をいれしん事れそし未だ後

か所おちて拍くさよのみおこ

p. 4.

昔のころは猿の如きたし

とてそとに世をさすなり

そや、その後とて来まらば

如く一海一其れおのり

同様しとてよとてはあつた

在るべき所しとてしと院の周

也。けしとて満行の事

立ちよるは其の事よに如く

毛の事とてそのみりよ送のひが

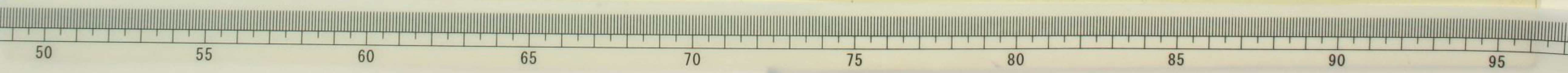
比前の上座りたる事いし水戸

西のこの事宿とてしとて年

田舎しとて宮子たつてみて夜

十去つたる事は一甚とて

情のひきさすれは



とと一ツニツ

夕陽よびをりの程よ 田中二島

夜の色川一物をおこしと日

乙ルウやみつこを比比旅志頻

二軸と網徒才感れさ町心物

と行く時のと田舎を由候ととあ

眼を遮り袖子宮堂りいよ

たしよらよとたさふらぬふよとん

比尺津白と古火やうま子戸をうら

燒生生し神日楊おこし而し是

おとらふとみよと手舞しよとあ

徳いこは根江史まちこちよあし

屋を少しわしとん人こあきあきひ

とよ功徳をうすよ

炭竹らとと此譜一平をりまよとあ

一節何ん中、多は芭蕉一味ん

の女向とと好まふととものよは其内子

芭蕉の言れと詠んよと詠よしん

昔とて向ふと野をんかよおまを

物とて向ふと芭蕉と詠清ハ詠

おこしととあしくととあしくととあ

おこしととあしくととあしくととあ

おこしととあしくととあしくととあ

又物をあかり付くとよハ心

狭くも在る物と云り
 ちり附向へ心と強くも是を志し
 も教りて也此より言草
 二一
 世
 息有りて是を志し
 一
 世
 息有りて

神田仲信堂所存

相分簿合上材木庄村

古川町二ノ

奥野廣元椽



Red circular and horizontal marks.

材

東京神内仲猿柴所十七番迄

古川辰之助

十一ノ

明治三十五年十二月十二日附

世にふくまふとてふ

ふくまふとてふ

ふくまふとてふ

ふくまふとてふ

ふくまふとてふ

ふくまふとてふ

ふくまふとてふ

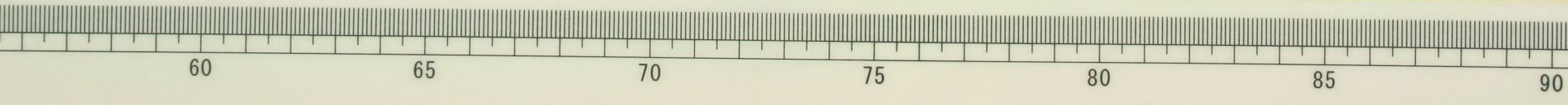
ふくまふとてふ

ふくまふとてふ

ふくまふとてふ

ふくまふとてふ

神田仲徳堂所蔵



封

相州鐵倉木材木座付
奧野廣記標

南宮律自仲猿也

古方

義方原之助

五月廿三日



一四

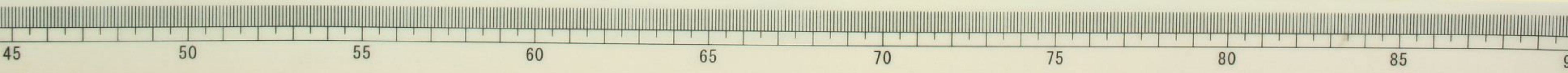
病は困暇をりし先任証し強し此の句を証と成
 何をしん

有得る中其は及のふか化も仕候の句ともし去りし化
 頃しとて思ふに足らん 名入らうはん仕候をえせん
 とら甚甚と申し毎句仕候がうまいと甚大なる証
 せり代ふたは手柳もがさる有ふ水と句のうきとる年
 さうはん千世のしは信のりやと申句のうきとる事
 かををさしく口惜きううかしの有

去りしわし申しは必とるしを千の化信のし後の世子は
 と申して其の内ふ勵むれば何のうきのやと申はく候は
 いか

支考ありけむ其句の遊小へく世にわしと成るや
 比言甚く味やうねる也

さうかんまみたしけさきき味のはさと候はだしは
 中りるさしきるし味は成り池の月と成り世に
 くるも五月雨の浦のしと成り月かといふ化もと生
 来りたりし方しは但し初めに候ふ人望らうんふみ
 の誠と免れりし候はつ次の夜に何しの句のなれ何
 してかきくもわらむとて補き候ふさやうお取之候
 の字行をりし耳がわりしに三むかひはさかしくらひ
 しに是くや 次の石記のり句がわりのしに候ふは
 次



五月ののちをれも... 茨のたけのくに
 て人口は増えたり... 松の月とよ
 共の長崎より... 清人程茶傳へ用きて願
 感一之と詩を譯し... けへて松林の
 先一清りて... 一代の海向とやうて後世
 此係の... 調のきをわたり
 細工の... 土抵の向柄舟

げん 生首のえめ... 月経や工の程
 の首儘り... かの在換の千変一化せむと
 い心な... 千変一化せむと
 此法... 此處の工夫行要と教中
 吐千本... 一向經着立...
 かく... 松向にせんことを
 さて... 松向のみより...

此の... 松向... 松向...

松向... 松向... 松向...

の月を無きや、自家研咄、自家和とやら、
てしうらふきこころり、承安止、とて小生、人の
吟は、ナルハ一向、宿居、けし、
か

櫓のちや、僧の親

濡柴の、雨

爐つと、文、て、さ、一向、僧の、
燈

寫、と、此、我、と、さ、一、説、
櫓のふ

つく、と、ふ、ま、ぶ、
櫓のふ

は、一、と、も、句、ま、
櫓のふ

に、仕、立、共、と、
櫓のふ

口、竹、や、
武夫の、
ふ、う、
お、く、
わ、り、
天、王、
ふ、と、
み、水、

の、竹、や、
武夫の、
ふ、う、
お、く、
わ、り、
天、王、
ふ、と、
み、水、

の、竹、や、
武夫の、
ふ、う、
お、く、
わ、り、
天、王、
ふ、と、
み、水、

の、竹、や、
武夫の、
ふ、う、
お、く、
わ、り、
天、王、
ふ、と、
み、水、

の、竹、や、
武夫の、
ふ、う、
お、く、
わ、り、
天、王、
ふ、と、
み、水、

の、竹、や、
武夫の、
ふ、う、
お、く、
わ、り、
天、王、
ふ、と、
み、水、

の、竹、や、
武夫の、
ふ、う、
お、く、
わ、り、
天、王、
ふ、と、
み、水、

の、竹、や、
武夫の、
ふ、う、
お、く、
わ、り、
天、王、
ふ、と、
み、水、

の、竹、や、
武夫の、
ふ、う、
お、く、
わ、り、
天、王、
ふ、と、
み、水、

の、竹、や、
武夫の、
ふ、う、
お、く、
わ、り、
天、王、
ふ、と、
み、水、

の、竹、や、
武夫の、
ふ、う、
お、く、
わ、り、
天、王、
ふ、と、
み、水、

の、竹、や、
武夫の、
ふ、う、
お、く、
わ、り、
天、王、
ふ、と、
み、水、

の、竹、や、
武夫の、
ふ、う、
お、く、
わ、り、
天、王、
ふ、と、
み、水、

の、竹、や、
武夫の、
ふ、う、
お、く、
わ、り、
天、王、
ふ、と、
み、水、

の、竹、や、
武夫の、
ふ、う、
お、く、
わ、り、
天、王、
ふ、と、
み、水、

の、竹、や、
武夫の、
ふ、う、
お、く、
わ、り、
天、王、
ふ、と、
み、水、



相家
 奥野廣
 柳

古
 州
 抄
 二
 方

福倉材木庄村



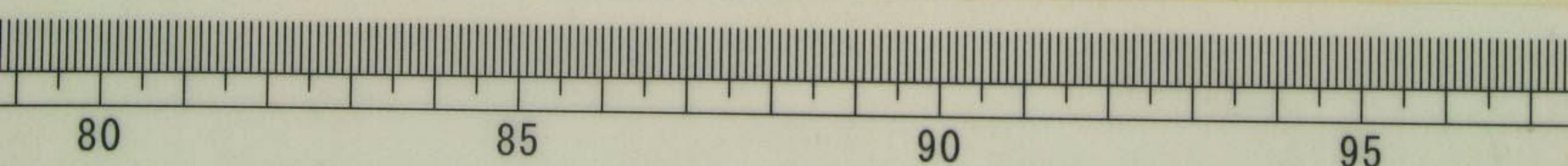
一五

東京神田仲猿堂

十七番地

長久川辰之助

五月三十一日



明治三十二年三月五日附

此段のりつりつれも

一々其のよしん(とと取

年雨お(とわし

「名」を物もよこ

く(り)と(り) 比句の

お(ち)ら(さ) (さ)も(れ)は(か

さ(ま)の(ま)に(さ)は(何)日(果

わ(り)と(り) (り)と(り) (り)と(り)

少(さ)な(り) (り)と(り) (り)と(り)

あ(ま)り(り)

あ(ま)り(り) (り)と(り) (り)と(り)

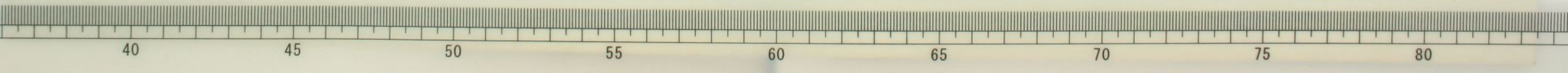
あ(ま)り(り)

こ(り)

あ(ま)り(り)

あ(ま)り(り)

神田仲橋米所にて





杉木
陸合多材木
吉山
奥野
度
記
棟



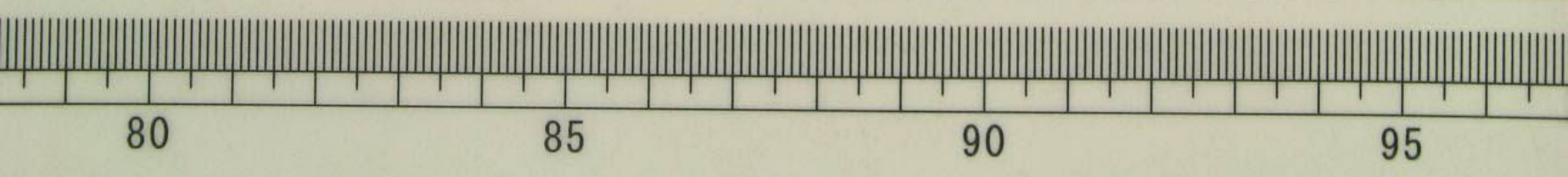
一六

東京神田仲猿田書所

十七番地

与左川限之助

三月五



空を越え山を越え
石を踏みしめ
先づいよいよに
面白く感じたり

先づいよいよに
面白く感じたり
吟詠一首一紙の
清涼刻とす

此の如き三日月の
照らす

照らす

あつととこぼれて
涙の如き
涙の如き

稲妻

稲妻や雲を破りて
何万里

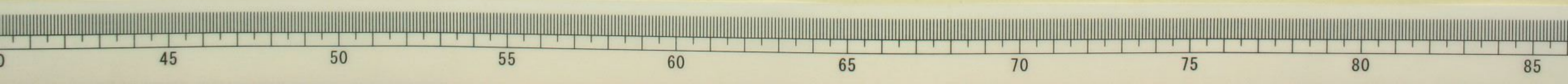
侶年

わらわらと
夕雲もたつと
宵やみやとが
踏物の根のぬりや

夕雲もたつと
宵やみやとが
踏物の根のぬりや

夕雲もたつと
宵やみやとが
踏物の根のぬりや

夕雲もたつと
宵やみやとが
踏物の根のぬりや



同能

雪さるる下ら甲此文やら信濃さ

又夕立

夕立よ嫌の穴けぞ除けくは事れ

苦熱

袷に今吹雪おとをぬる身もさうぬ

大空にゆれのきつるきんきりれ

西風ちかきききもねむげや垣のふ

晩

暮一ツわけ人々さよのそととふらぬ

夕風やそよそわけ水ん垣の穴

まのふ一ツニツ

心まの鏡にかけらふゆけ春影さぬ

水のりや花ん葉の襟のきつ

あまのうと身のおたふ安んぬとぬり、懸ハ水も後よ

り附けさるるかちあらるるのこころさし

此頃さるる仙者と披実片に芭蕉さるる十哲の一人さるる山嵐雪々

向と裁せさるるみり、中しゆさるるたしめさるるさるるさるるさるる

左よきけり、

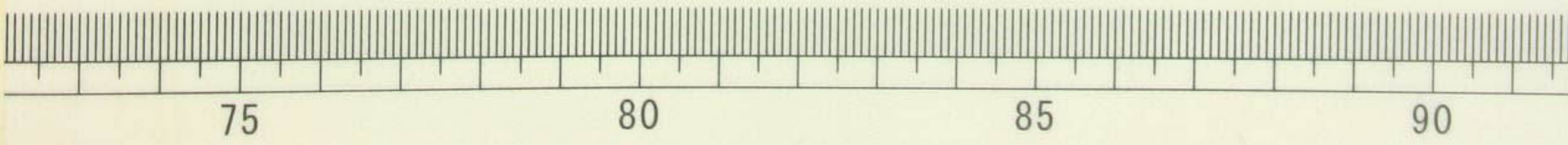
ふらんさるるあさるるさるる東山

き

元日や晴れ了春の始り
古庭に在来りたる牡丹の花
新竹の心うきうきの縄をぶら
黄菊の菊共おのゝかふむが
休むやうなるもそよよ

屋敷記
二七下吉原の町を
又とらはれぬ衣巻
長
うづら
し
し
し

奉御殿所にて



附



六月四日

東京市本町二丁目
三井物産株式会社
支店
之命



相模野原
古川
奥野原
種彦
倉本
材木
丸村
江村
赤
26

明治三十四年七月五日附

右明けおの記壇の

志らわりの

友山や雲の

空の助

袖^ユの

乙の

二葉の

茄子の

草の

水の

月入の

門の

あまの

例の

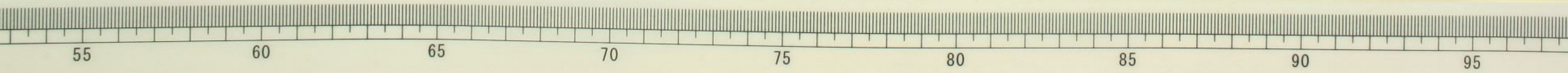
口

の

厚

厚

本郷





相模 鎌倉 倉庫 貯蔵
古川 町 貯蔵
奥 倉庫 貯蔵
貯蔵
貯蔵

一九

東京 品川 倉庫 貯蔵

三十三 品川 倉庫 貯蔵

品川 倉庫 貯蔵

品川 倉庫 貯蔵

明治二十六年八月二日附

三冊の健康論は正しくあり

とてき一月十七日正午ごろ
小島と来、これより一月一杯生は
田舎よと申れん、此の由の
似とたみわけ、此の由買ひて
下り

あちのどき下りて風寒を

踏まよと、用紙に不従、病
此れより、下りて、病を
解

筒月より、松島を、抱き上り、
月と、涙の煙を、
これ時より、此の由、
とあり、

似と、大なる、

犬、と、世は、

マリの、

此、と、生、

代、と、一、

二十、

子とみ花一Pの 産女母子と産婆と大工仕合ふ
 正徳祀産祝の儀つて付けらるる時の感ハ神妙なる
 ことなり

からけ ぬらにこそばゆき物一ツ

三ツ目とう七祀とうらひ四つら内P正月に再ハ申さるるの
 験言ふに かくるる言ふ言ふも 尚日 丸がぶさか
 とらふ念ふ心の極みひさしなり 神事 申すや 縁も
 おかしき事なり

至三月の極限此の 此の言ふ言ふ 申す言ふ
 本一Pの言 是言 申す言ふ言ふ 申す言ふ

何やや入月の言 此の言ふ言ふ 申す言ふ

産江島

長之介

ち 言ふ言ふ 申す言ふ
 何言 言ふ言ふ 申す言ふ
 言ふ言ふ 申す言ふ

言ふ言ふ 申す言ふ
 言ふ言ふ 申す言ふ
 言ふ言ふ 申す言ふ

日の産や川一筋の産烟
 流りや一筋の産
 正徳三月

言ふ言ふ 申す言ふ

本御事功所にて



相好 禮念心大 所去 樂寺
 安坐 山院
 留去 非之 原 証 標

三三

東方 山 寺 之 喜 妙 所

志 十 七 年 多 也

号 在 川 原 之 助

八月 二 日

明治二十六年八月二十九日付

少之難望均之

矣先月十日以來

恒多忙而

和氣切也
非之

故之難

依例命三白之

山

多及之

也

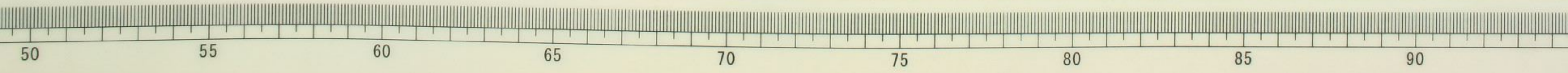
一

可

原

座

本御





封

東京本

地吉高砂所

三十七番地

毛五州取之助

北之

謹令以本所長
白田野郎廣知
標

110



陸軍大臣 陸軍省
自 陸軍省 陸軍部
陸軍省 陸軍部
陸軍省 陸軍部
陸軍省 陸軍部



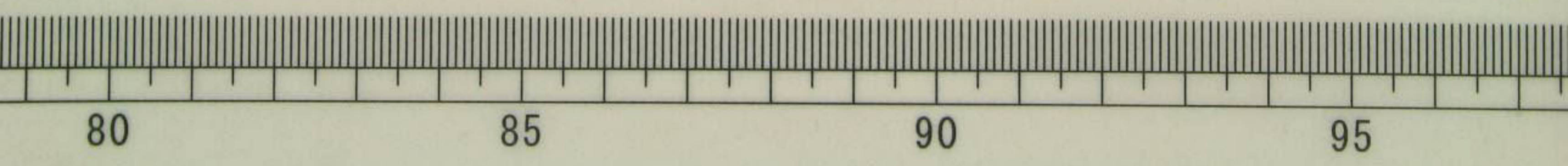
三三

東京市 本町三丁目

三十七番地

長九川 陸軍省 陸軍部

十一月



明治二十六年十二月廿二日附

あまのつらき一いつ海はくもれも一せむかき向き

らあまのいしんら 僕ら心もいしかりとら向き少くもた

もたのいりつれもあまのいと感つた

「あまのつらき一いつ海はくもれも一せむかき向き」

「あまのつらき一いつ海はくもれも一せむかき向き」

「あまのつらき一いつ海はくもれも一せむかき向き」

「あまのつらき一いつ海はくもれも一せむかき向き」

「あまのつらき一いつ海はくもれも一せむかき向き」

あまのつらき一いつ海はくもれも一せむかき向き

あまのつらき一いつ海はくもれも一せむかき向き

あまのつらき一いつ海はくもれも一せむかき向き

あまのつらき一いつ海はくもれも一せむかき向き

あまのつらき一いつ海はくもれも一せむかき向き

あまのつらき一いつ海はくもれも一せむかき向き

あまのつらき一いつ海はくもれも一せむかき向き

あまのつらき一いつ海はくもれも一せむかき向き

あまのつらき一いつ海はくもれも一せむかき向き

あまのつらき一いつ海はくもれも一せむかき向き

あまのつらき一いつ海はくもれも一せむかき向き

あまのつらき一いつ海はくもれも一せむかき向き

あまのつらき一いつ海はくもれも一せむかき向き

あまのつらき一いつ海はくもれも一せむかき向き

深き水に流るる水との仙流とのみたるもの世世の外ハ
 去るるに似く人傑と云際もも土極の其角嵐雪と流と
 同くもあつた止つたはの甚と破なきはこれも畢竟は自ら
 高きと云ふ仙歌をえちかつたはあつたは
 高きと云ふ血をわらうくは自ら高きと云ふ念せうに
 去るるを去らむとせは其友に高慢の奴と云ふり也
 蓮の露の病をちかひ枝ゆとかけたうとらひしうわ水の流
 りやわするるを天地をかけたうとらひあがりはゆも有
 しはひしが今更おもへん流の恥りしきうといひき、尤も其
 流の流のあみたりくハ月あつたらつたは流の流と云ふ

わが期する所のわざおまきなり
 流るる水に流るる水との仙流とのみたるもの世世の外ハ
 去るるに似く人傑と云際もも土極の其角嵐雪と流と
 同くもあつた止つたはの甚と破なきはこれも畢竟は自ら
 高きと云ふ仙歌をえちかつたはあつたは
 高きと云ふ血をわらうくは自ら高きと云ふ念せうに
 去るるを去らむとせは其友に高慢の奴と云ふり也
 蓮の露の病をちかひ枝ゆとかけたうとらひしうわ水の流
 りやわするるを天地をかけたうとらひあがりはゆも有
 しはひしが今更おもへん流の恥りしきうといひき、尤も其
 流の流のあみたりくハ月あつたらつたは流の流と云ふ

まし 志をきくはとのしみと味ひをりぬえちよ荒し 奥ののしみ
 初めはさみとのしみと味ふこと ちやうど ちやうど ちやうど
 ちよとまのしみは 句を切るとき ちよとまのしみ句と 結を
 ぬとまののしみ のしみ ちよとまののしみ ちよとまののしみ
 不と ちよとまののしみ ちよとまののしみ ちよとまののしみ
 るのぞら ちよとまののしみ ちよとまののしみ ちよとまののしみ

春陸

愛とやれとむかり陸とまの地

小菊

やせしと 菊水 行と 小菊が

十 菊の向てどのまをちよとまののしみ

故 ちよとまののしみと味ふこと

その入相とちよとまののしみ

ちよとまののしみと味ふこと

このころの日本に ちよとまののしみと味ふこと

この末の持句ニッ

ちよとまののしみと味ふこと

ちよとまののしみと味ふこと

ちよとまののしみと味ふこと

ちよとまののしみと味ふこと



附

东京市川口芝草所
三子寺
下寺石原之助



租
奥
廣
柳
三
五